

人生歌集「風」

(一)

多谷昇太

— 総歌 —

ひとは風ときに暴れそよぎ過ぎゆかんまた
めぐりこよ地にあれて吹け

— 風を聞く —

よはひ八十やそこゆべき翁野毛山にホームレス
なりしが死にてカラスつく

その翁病死にあらず消さるらし憂き世たへ
きてしまひこれはも

風を聞く森の千葉せんばのそよげるを人の世みに
くただ風を聞く

¹ふぜいあるどぶ川堤ゆくほどにめをと寝を

るはなんのけしきや

どぶ川の縁石畳家なるか家具のべふせるめ
をとあはれも

そもいかにかくあさましうなりけるやしづ
むる背子に妻のはべるも

ながれくるハーモニカの音ねなつかしくなら
す老女の澄みしころと

「にいちちゃんね」おもねるみっちゃんおよ
すけて子守りのあの子ももういない

かはひらし観覧木馬母そふ幼女こむかしいぎ
なふいとしさの里

※佐野藤岡P/Aの遊園地にて

おもしろき石垣あればのぼりあゆむ幼き子
らよ未来沢のぼれ

寒からむとおもふものからこれは野暮冬も
粋だね今女子高生

電車なか座地蔵みならびよに立たぬ我うつ
せきを読みてこゑにす障害児あり

殺伐と眉根ひそむる少女みき古刹の阿修羅
ここにそ見たり

※スペイン内乱の報道写真にその子あり

垣はらふ真理の語り部いとしかり神のアフ
リカ、オイボ（外国人）につたへ

※詩人で写真家の板垣真理子さんを詠む。彼女

は毎年のようにアフリカを訪れ、現地の人々
をメインに動物、風物を詩に描き、写真に撮
っている。作品は両方とも実に素晴らしい。

名人は間はざまとれねばそれならず演を縁とし

落を楽ともす

※先代三遊亭圓楽師匠を詠む。間（はざま）と

は緩急自在の高座の間（ま）、且つ客との縁
を結ぶが如く間（あいだ）を取り持つことを
云う。

べらんめえと客さえ叱る強男そののべさす
は弱への愛かも

しまひにはめぐみの園へまねかれて重きな
したり、いよつ演学士

※右二首、故立川談志師匠を詠む。めぐみ…マ

コバ渡辺めぐみアナウンサー。

落語家の江戸前づくしべらんめえ立て板み
ずと聞いてはればれ

時こへて高座にまじるこゑありて我しを罵^のればこれぞ野ざらし

※故春風亭柳昇師匠の○D中に「プータ」と罵る声あり。巷で私はプータと呼ばれている。

浅草や睨^{ねめ}つけなじる与太者にをぢてはならじと若き警官のあり

忘れはつ日本のこころ情けをよ揺すりかへしむこまどり姉妹

老ひたりとおもふものからなほ愛し昭和歌姫いとどしのべり

今はもや六郎絵のみに星の夜まづしさしたひて天心はなれ

※六郎…谷内六郎

僧正であらぬ旅路の即身仏いかなおもひで
払拭したまへる

※もはや乞食遊行に疲れ果て永遠の投宿をす
るが如く即身仏を寺に申し出たと思う。

人形か母に手をつぐ女の童世の痴れ者のえ
たへで頭をなづ

※質屋で会った母子。男の子を背負い女の子を
連れた若き母親。人形のように可愛い女の子
は自分が何処にいるのか理解していない。そ
のあまりのいじらしさに：

神妙に老母の容体つげくれしヘルパーの娘^こ
に唯唯忸怩

塵にまよひ異邦人ともなりきれずママンの
里へ繁くもなれず